

宗教とヒューマニズム

徳 永 道 雄

(京都女子大学)

1 .

二十一世紀は「こころの時代」だとか「宗教の時代」だとは、よく言われることであるが、それがいかなる意味においてなのかは必ずしも明らかではない。科学文明のあまりにも急速な発達によってもたらされ、またもたらされつつある人間性の急激な変容に恐れを抱き始めた人々の切なる願望から出た言葉だととらえるのが、最も適切であるかもしれない。しかし、考えようによっては、これらは一種の責任回避とも言うべき言葉ではないのか。つまり、自分は科学文明の恩恵を十分に受けながら、それがもたらすマイナスの要素の解消は宗教に負わせるという類^{たく}いの責任回避である。はたしてそういう役割を宗教が果たすことができるか否かはまったくわからないが、ただ、宗教がその本来的な役割だとされてきた「個の救い」という要素に加えて、かつてなかったような社会性が要求されるようになったことだけは間違いないと思われる。

「かつてなかったような社会性」とは、言うまでもなく、科学技術の未曾有の発展によってもたらされた文明の均一化によって、人類が直面せざるを得なくなった問題のスケールの大きさと、その異質性によるのである。早い話が、昨今の情報技術のめざましい発展や、生命操作の医療技術、あるいは一瞬にして一千万人単位の人間を抹殺できるような爆弾や、地球環境のこれほどまでの破壊等を、この二十世紀の初めに誰が想像し得たであろうか。特に、脳死・臓器移植、クローン技術、あるいはES細胞の作成などの先端医療の進歩は、人間が侵すべきでない領域を侵しているのではないかという恐れさえ生じさせている。このように、好むと好まないとにかかわらず、現代の人間の一人一人が過去の時代においては考えられもしなかった規模の問題を背負っており、またその深刻さも従来の尺度では計れないほどのものになってしまっているのである。

このような人間の状況に対して宗教が無関心であることはもはや許されなくなっている。例えば、これまで仏教は他宗教、特にキリスト教から、その歴史性ひいては

社会性の欠落を指摘されることが多かった。それはとりもなおさず西洋的な意味における倫理性の欠落ということであったかもしれないが、「個のさとり」とか「個の救い」を第一に強調して存続してきた仏教としては当然のことであり、またそれこそが仏教の独自性でもあった。しかし、先に述べたような現代の人間の状況を鑑みると、従来の「個」の概念は通用しなくなったと考えざるを得ず、したがって、いわゆる「さとり」や「救い」の構造も変容せざるを得なくなったのではないかと思われる。いかなる宗教に属する人間であろうと、共通の問題を背負っているという視点に立って、その答を見出す作業にとりかかる必要がある。およそ宗教者ほど独善的な存在はないといっているが、今や個々の宗教の優劣を論じている場合ではなく、現代の世界に共に生きる人間としての意識をもって、伝統ある諸宗教が対話を重ねて、先にあげたような多くの問題に対処する必要に迫られているという現実がある。ただし、その際に是非とも注意しなければならないのは、いわゆる「ヒューマニズム」との混同であろう。ヒューマニズムの定義は特定できないが、今はいちおう「人間と人間の問題に対する人間による関心と愛情」という最も広範な定義を用いるとすれば、そこに宗教が入り込む余地はない。現代の問題に積極的に発言しているいくつかの宗教の関与の仕方を見ても、ただヒューマニズムを標榜しているのみで、宗教としての立場はどこにあるのかと首をかしげざるを得ないものが多いのではなからうか。宗教であるかぎり、ヒューマニズムの限界、あるいは人間の分別・理性に対する過信、を明瞭に自覚して現代の問題に対処するべきではないのだろうか。それはちょうど仏教のいう「世間善」と「出世間善」のけじめのごときもので、後者をもってはじめて現代の人間につきつけられた未曾有の問題について宗教が発言する意義があると考えられる。以上に述べたように、現代は過去のあらゆる時代と比べて個人の存在が飛躍的に社会化してしまっているため、そのことを考慮に入れなければ宗教本来の役割である自己の内面の掘り下げ、およびそれによる自己解放も実現できなくなったと言えよう。そこで、自らが奉ずる宗教的真理によって人生を生きようとしている者も、その立場から現代社会の問題について考えることが要請されるようになったのである。それはとりもなおさず自らが奉ずる宗教的真理と先に述べたヒューマニズムとの水際を明確にすることである。今やヒューマニズムは現実社会の動かせない価値基準であるといっている間違いはないだろうが、もしもそれをもって宗教の社会性の基準であるとするならば、そこに宗教的価値を標榜する意味はなくなるからである。

個人的経験からすれば、アメリカの大学のキリスト教神学と接触する機会があり、そ

れをつぶさに眺めていると、神学がヒューマニズムを生み出すのではなく、ヒューマニズムに引っ張られて神学があるという傾向があるような気がしてならない。今やアメリカの神学は社会の発展や人類の福祉にどれだけ役立つかという仕事になってしまったとって過言ではない。それはそれで結構ではあるが、そこにキリスト教の立場からの独自の視点が欠けているならば、神学者の発言であるという必然性はないように思えるのである。

仏教の国際学会においてもこれは同様で、ヒューマニズムの視点からとらえられた発言や発表が横行している。つまり、ヒューマニズム一辺倒の立場に立って、仏教は社会の倫理や世界の平和に寄与することのできる要素に^{たく}充ちているという類いのとらえ方であって、前進的で、力強く、明るい希望に満ちており、それはそれでまことに結構であるが、何か重要なものが欠落しているのではないかという疑問を感じない人はいるまい。それは人間を超えた立場からの視点が決定的に欠落しているのではないかという疑問である。

2 .

確かに現代の世界は現実にはヒューマニズムを原理として動いている。したがって、いたずらにヒューマニズムを否定するだけでは、社会と融和してゆくことができなくなるであろうことは間違いない。特に昨今の新・新宗教といわれる集団の目に余るような行動によって、現代の若者の中には宗教といえば危険なもの、反社会的なもの、反倫理的なものという先入観をもっている者が多いから、宗教がそういうものではないということ的印象づけるにはヒューマニズム的な要素を強調する必要もあるであろう。

しかし、同時に、というよりは本質論として、個々の宗教本来の真理を表に出すことがないとすれば、宗教の立場からの発言としての意味はない。そして、いかなる宗教も人間性の限界という立場を共通の地盤としていると言って間違いはなく、またそれこそが宗教が現代の問題に対して提示できる要素であると考えられる。例えば、仏教で言えば、その本来の真理である「人生は苦であり、自己の本質は無我であり、世界は無常である」⁽¹⁾ という仏陀の教え、あるいは「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたはごと、まことあることなきに・・・」⁽²⁾ という親鸞の言葉によって示唆されているものを見失ってはならないということである。

人生や世界をまず否定を通して見るというのが、他に類のない仏教の特徴であった。^{るい}そして、仏教が現代の世界に提供しなければならないものは、こういう仏教独自の視点であろう。先に引いた「人生は苦であり、自己の本質は無我であり、世界は無常である」という仏陀の教えや、あるいは「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたはごと、まことあることなきに……」という親鸞の言葉は今もってその価値を失ってはいないと思えるし、またこういう視点から社会の諸問題に対処することは決して不可能なことではない。これらは決して人生や世界を全否定しているのではなく、世間的な価値観とはちがった価値観をもって人生や社会を見ることを示唆しているということなのである。

ところで、梶山雄一氏は“ニューサイエンスとシンポジウム”というエッセイにおいて、現代の学際的共同研究から得た経験から「研究者のひとりひとりが自分の専門とする学問の前提となっている仮定を超えて、他の学問の前提する仮定との調和をはからねばならない」⁽³⁾と述べている。氏はさらに、

東洋と西洋、科学と宗教などのあいだで討論が行なわれる場合には、各参加者は、西洋思想の基調となっている実体的な自我とか靈魂への信仰や、二元論や還元主義をひとまず捨てるとともに、東洋の無我とか空の立場や物心一元論をも超えて、共通の立場に立たねばならない。人間が物質世界の外側に立って自然を客観的に観察し分析する西洋的な立場と、主観・客観の未分の立場、いいかえれば、人間と自然との一体性を尊重する東洋的な考え方とのあいだの乖離を乗り越えることができなければ、シンポジウムや共同研究は成立しないのである。⁽⁴⁾

というが、これは先の「個々の宗教本来の真理を表に出すことがないとするれば、宗教の立場からの発言としての意味はない」という筆者の主張と真っ向から対立するように思えるが、決してそうではないであろう。梶山氏は個々の宗教の独自性を捨てたのっぺらぼうの真理をもって共通の真理とせよ、などと言っているわけではない。それは、

東と西、科学と宗教などの相互の対話と交流なくしては、われわれが現代の世界に生きていけなくなっていることほど確かなことはない。暗中模索のうちにわれわれが学際的なシンポジウムを開き、共同研究を行なうのも、その要請に応える道を探らねばならないからである。⁽⁵⁾

という氏の発言によって明らかである。つまり、現代の人間に課せられた問題の解決のためには宗教間の対話は不可欠であるという大前提があり、そうである以上は対話と討

議を重ねる以外にはないと氏は言っているのである。そして、

そのさい重要なことは、各人が自己の学問や思想の前提となっている立場を反省・自覚し、一旦それを超えた地平に立って議論をするように努力することである。⁽⁶⁾

と、最初の引用文の意味が明らかにされている。

もしも個々の宗教がその独自性を失えば、それはその宗教が生命を失ったにも等しいことは言うまでもない。しかし、その独自性を主張するのみでは対話や討議の意味がないことも自明である。梶山氏はその経験から、そういう独自性の主張、言い換えれば他の宗教に対する自らの宗教の優位性を主張し合うことの無効性を指摘しているのである。そういう独自性の主張・自らの宗教の優位性の主張は、容易に克服し難いものがあるが、「一旦それを超えた地平に立って議論をするように努力する」以外にはない。それはとりもなおさず共通の地盤に立つということであるが、その共通の地盤こそ現代の人間が負っている「かつてなかったような社会性」、つまり現代の我々一人一人に等しく課せられている未曾有の問題に対する取り組みの姿勢であると思われる。

(註)

- (1) いわゆる「三法印」(諸行無常 諸法無我 寂滅為楽)あるいは「四法印」(諸行無常 諸法無我 寂滅為楽 一切皆苦)のこと。
- (2) 『歎異抄』後序。
- (3) 「ニューサイエンスとシンポジウム」(『死生観の種々相』、佛教大学総合研究所、1996年)の“はしがき”。
- (4) 同上。
- (5) 同上。
- (6) 同上。